

医療機器・設備の保守管理に必要なID識別をどうするか
—バーコード・ICタグのニーズを探る—

医療機器・設備管理に IC タグはどこまで活用できるか

白石 裕雄 (社)日本自動認識システム協会
医療自動認識委員会 委員長

最近、IC タグに対する見方や期待が大きく変化している。IC タグが注目を浴び出した2000年頃に、IC タグは「次世代バーコード」と呼ばれ、これからIT社会を変える重要なキーとして各方面から着目された。IC タグは、

○ 数千桁のデータが読み込んだり、書き込んだり出来る。○数mの距離からデータを読み取ることが出来る。○複数の IC タグを同時に読み取ることが出来る。○汚れに強い。等々絶賛された。バーコードは、もはや古くて価値が無いような扱いを受けた。IC タグに注目が集まったのには理由があった。バーコードが登場して約25年。今では小売市場でPOS レジが普及し、売り上げ登録にバーコードは不可欠となった。そのバーコードを開発した米国マサチューセッツ工科大学が、2000年頃に IC タグを新たな情報媒体として紹介した。小売関係者はもとより IT 企業は一様に大きな衝撃を受けた。世界最大の小売業ウォールマートが、取引先に IC タグを付けて納入させ、製造から小売のサプライチェーンで、IC タグから自動的にデータを収集し活用するという構想を打ち出した。サプライチェーン上の万引き等の商品ロスを防止し、店舗の在庫切れも無くなる。将来は買い物籠の中に入れられた沢山の商品を、レジに置くだけで売り上げ登録が完了する。夢のようなビジョンを描いた。これを受けて小売市場だけではなく、あらゆる産業で IC タグの活用を国や大学が取り組み出した。数年間は実証実験が行われ、多くの注目を浴び新聞雑誌に話題が載った。しかし、徐々に IC タグは「次世代バーコード」ではないことが明確になってきた。一時期は IC タグがバーコードに比較してコストが高いという点に議論が集中した。これも問題の本質ではなかった。電波をつかった情報の伝達は100%確実でないことがポイントだ。IC タグで普及成功事例として取り上げられる JR のスイカ、イコカ等々の IC カードだが、改札口で IC カードをかざしても、改札ゲートが開かなくて苦い経験した方も多し。そろそろ、医療の市場においても、「IC タグが出来ること」「バーコードが出来ること」を明確に整理して本来の IC タグの機能を活かす使い方を検討すべき時期に来ている。医療機器や設備に IC タグがこれからどんな活用がされるのか事例を含めて紹介する。